

大嘗祭と第一回式年遷宮は無縁か

即位礼正殿の儀と大嘗祭を控えての断簡（二）

はじめに：大礼委員会の見方の軽さを指摘する

第八回（10.02）大礼委員会で配布の『大嘗祭について』（参考2）は、
 >大嘗祭の沿革をたどると、その起源は、新嘗の祭に由来する。新嘗の祭については、我が国最古の歴史書である古事記（712年に撰進）や日本書紀（720年に撰進）において、皇祖天照大神が新嘗の祭を行われたことや上古の天皇が新嘗の祭を行われたことの記述が見られるように、その起源は、それらの歴史書が編纂された奈良時代以前にまで遡ることができる。（中略）

7世紀中頃までは、一代に一度行われる大嘗祭と毎年行われる新嘗祭との区別はなかったが、第40代天武天皇の時（御在位673～686年）に、初めて、大嘗祭と新嘗祭とが区別された。爾来、大嘗祭は一世に一度行われる極めて重要な皇位継承儀式とされ、歴代天皇は、即位後必ずそれを行われることが皇室の伝統となった。<（2 沿革）とした。

この説明での問題点は、二つある。一つは、天武天皇の即位儀礼において大嘗祭と新嘗祭の区別がされた、と判じていること。だが、その区別の内容については、「極めて重要」だというばかりで説明していない。その二、である。

（1）持統天皇に始まる大嘗祭が今日まで継承されている

天武天皇の即位において大嘗祭が「区別」されて重要な地位を占めたと、上掲の「沿革」はいう。だが、現代にも至っている経緯を視野に入れて、儀式としての位相を考えると、大礼委員会の見方と違い、まだ「過渡的な“形成”の時代だった」と、高森明勅は指摘した。当該分野で「官より民を」との独自の視点を実証的に示した著『天皇と民の大嘗祭』（展転社。平成二年。116頁）で、今日に至る大嘗祭の原型を形作ったのは持統天皇から、との見方を提示した。

持統天皇から始まるという理由をいくつかの条件を挙げているが、それら提示された諸条件は尤もではある。だが、私見によれば、高森の独創的な解明でも欠いているものがあるのを、この機会に敢えて提起しておきたい。

高森は、持統天皇の即位が690年、しかし同年に神宮の式年遷宮の第一回が開始されたために、大嘗祭は次年になった、と見ている。彼の表現では、「おそらくそのためであらう。この年の秋に行はれるべき持統天皇の大嘗祭が斎行されたのは、その翌年」（同頁。下線は引用者）と見た。即位の諸礼と式年遷宮が重なったので翌年への持ち越し、という説明である。

ここに記されているのは、大嘗祭と式年遷宮は国家的な行事ではあるものの、並列的な風であって、両者の有機的な関係を示唆する文言はない。高森の記述の仕方が突出しておかしいわけではない。大方は、大嘗祭と第一回式年遷宮の有機的な関係には全くといっていいほど触れない。大嘗祭は大嘗祭、式年遷宮は持統天皇時代に始まった、と指摘するだけである。こうした解釈はいかにも不親切と思う。なぜなら、「式年遷宮の制」は685年。天武天皇の崩御は、その一年後のことだから。

（2）大嘗祭と式年遷宮の開始は単なる並列で捉えていいのか

皇室にとって神宮の存在は特別の意味合いを有している。簡単にいうと、神宮の特徴は皇祖・天照大神の御神体である八咫鏡が安置されているところにある。その内宮・外宮の社（やしろ）を二十年に一回新築し同じ様式で再

生する、いわゆる式年遷宮の制は、第一回が690年に内宮、692年に外宮で実現した。制が定まり、5年後のことだった。

天武天皇が遷宮の制を定めるに際しての動機は、日本という新しい国号、また天皇号にふさわしいみ社（やしろ）が永遠に瑞々しく継続するため、という深い思いの結晶化からであった、と見做していい。増改築をしていくのではなく、そのまま再生するところに、他の文明とは全く違う畏む行の哲学がある。

作家三島由紀夫は、『文化防衛論』で遷宮に見られる文化の再起性の特徴を、

＞持統帝以来五十九回に亘る二十年毎の式年造営は、いつも新たに建てられた伊勢神宮がオリジナルなのであって、オリジナルはその時点においてコピーにオリジナルの生命を託して滅びてゆき、コピー自体がオリジナルになるのである。＜

三島による遷宮という営為についてのこの卓抜な永遠性ないし継続性の解釈は、日本文明の「死と再生」を通しての創成の力学にある特徴を、要旨簡潔に述べている。天武天皇の志向は持統天皇に十分に伝わったのは、持統天皇による民先行の大嘗祭の輪郭にも出ている。前掲の高森著に詳しい。

終わりに：式年遷宮の哲学は大嘗祭の在り方と相似形にある？

大嘗宮における天照大神と新帝の共食という行為により確認される皇位の継承は、日本独自の祭祀であった。日本書紀や古事記はまだできていなかったが、その原型は伝承で共有されていた。神代からの伝承に基づいた祭祀は、大陸から伝播されてきた王権継承の儀礼における漢風とは全く異質である自覚はあった。皇位の継承諸礼における漢風は、当時の日本にとってはグローバル・スタンダードである。それらは日本固有の祭事とは違う、との自覚を充実させ優先したのが大嘗祭、と観ていい。

大嘗宮で斎行される祭事は終了後の壊却に見られるように、一回こっきりのものだ。式年遷宮に見られるオリジナルとコピーの関係構図との間に何らかの相似形を見出せるのではないか、思い悩んでいる。式年遷宮の制を定めた際に、その意味づけで漢風を意識しつつ深刻な議論があったに違いない。その議論の成果は、持統天皇の大嘗祭の輪郭に活かされたであろう。白村江の敗戦を経て再生しつつある当時の日本国の在り様を示す、二つの祭事の有機的な相関性と意味について、専門家による一層の取り組みを期待する所以である。